



史劇『斬馬謖』 宮越教授作

(支那語部)

大学文書館設置準備室展示



ハウプトマン作 ハムレット・イン・ヴィッテンベルク(昭和十一年十一月上演)

外語祭 の歴史

【参考】『東京外国語大学史』， 渡邊雅司「語劇の百年」『劇場を世界に—外国語劇の歴史と挑戦』， 東京外国語大学,2008年.

新書 太閤記 第一巻より第六巻まで 増刷発売中 六興出版部 定価各八円

復活第一回 外国語劇 語劇祭

英	JULIUS CAESAR ジュリアス シーザー	西	EL SEÑOR DE PIGMALION ピグマリオン ^の 親方	蒙	ᠮᠣᠩᠭᠡᠨᠠᠯᠠᠮᠤ ᠮᠣᠩᠭᠡᠨᠠᠯᠠᠮᠤ
独	DIE FAMILIE SCHROFFENSTEIN	露	HA ДИЕ どん底	暹	ເືອງ ພວງເຈົ້າ ຂົງ ເພືອກ 白象物語
佛	BOURGEOIS GENTIL-HOMME 町人貴族	印	प्रतिज्ञा (प्रतिज्ञा) 誓	葡	ENGANO D'ALMA 運命の悲哀
伊	DON RAFFAELE CHIARESE ESE IL TRONBONE	中	空城計 KUNG CHENG CHI	伊	PEMBALASANNJA めぐり合い

期日 10月31日 → 11月3日 場所 毎日ホール (午後1時・5時開演・入場料 ¥30)

主催 東京外国語学校・引揚傷痍者更生會援護

外語祭の歴史

今年 89 回を迎える外語祭は、講演会(1900 年～1908 年)、語学大会(1919 年～1928 年)、語劇大会(1930 年～1936 年)、語劇祭(1947 年～1954 年)、外語祭(1955 年～)とその名称を変え、今日に至る。その間、戦災や学園紛争などによる中断があったものの、100 年を越す歴史を有する。その変遷を振り返りたい。



(上) 『時事新報』に掲載された講演会挿絵。



(上) 第一回講演会について

【講演会】

現在の外語祭における語劇の起源は 1900 年に始まった講演会に遡る。第一回講演会は、本学の前身、東京外国語学校が高等商業学校(現在の一橋大学の前身)から独立して間もない 1900(明治 33)年 4 月 28 日、神田一ツ橋にあった高等商業学校講堂において開催された。千名を越す来場者を迎える中、全八語科(英・仏・独・露・西・清・韓・伊)の代表により日頃の修業の成果を顕す外国語の朗読・演説・演劇が盛大に執り行われた。

新劇の上演機会も少ない当時であって、外国語学校の講演会は注目すべき娯楽であった。講演会には外国公使や公爵・侯爵など著名人が来賓として集まり、『日本』や『時事新報』等の有力な新聞には、講演会の予告・批評が掲載された。上記の『校友会雑誌』にあるように、語学校の教員・学生にとって講演会はまさに「誇り」であったのだ。

しかし、1904 年の日露戦争の勃発に伴い、講演会は一時的に中断を余儀なくされる。翌年に講演会は再開されたものの、戦後には年々華美になりゆく語劇への批判も生まれ、また文部省からは時局を考慮せよとの通達も下り、演出を地味にするなどの対応が迫られた。そして 1908 年の第七回講演会を最後に、終に講演会は中止されてしまう。

【語学大会】

講演会の中止後、文部省に対する度重なる陳情が実を結んだのは、十余年を経た 1919 年のことであった。大正デモクラシーの昂揚を迎える世相を背景に、茨木新校長をはじめとする学校側の働きかけの結果、

講演会は語学大会とその名を変えて再開された。1919 年には、二度に渡り開催され、八語科(英・仏・独・露・西・清・韓・伊)の語劇は喝采を浴びた。この語学大会における語劇の様子は当時、発行された絵葉書によって様子を窺い知ることができる。

語劇はその後、社会情勢に左右され、様々な制限がかけられてゆく。1924 年には関東大震災(1923 年)の影響を受け、文部大臣から「学校劇禁止の訓令」が出され、語学大会における語劇は、扮装を一切取り止めた制服製帽による語劇の実施を余儀なくされる。この訓令は 1928 年に解かれたものの翌年「緊縮」を掲げ成立した浜口内閣の下、再度語劇は禁止されてしまう。そのため、この語劇の禁止された時期には、各語科が自らの研究成果を発表する国情展覧会が催された。

しかし、語劇開催を求める学生の声の高まりから、1930 年には語劇を中心に据えた「語劇大会」が開催され、1936 年に戦時を理由に中止されるまで、本学の名物行事であった。



(上) 1920 年第 3 回語学大会
仏語部『祖国』



(上) 1920 年第 3 回語学大会
蒙古部『天道好環』

【語劇祭】

戦後間もない 1947 年 10 月 31 日～11 月 3 日、毎日ホールを借り切って語劇祭(第 29 回)が復活第一回と銘打って再開された。引揚傷痍者更生会の援護を目的とした語劇祭には、全十二語科(英・独・仏・伊・西・露・印・中・蒙・泰・葡・インドネシア)が参加し、個性豊かな演目を演じている。

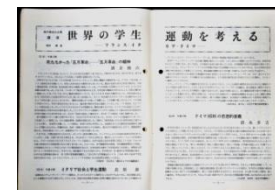
戦後の学制改革の波は本学にも及び、1949 年 5 月 31 日国立学校設置法に基づき、本学は前身の東京外事専門学校を《包括して》新制大学「東京外国語大学」と改編された。この改編を象徴する変化が、語劇祭への女子学生の参加である。専門学校時代まで、女子学生はおらず、女形が起用されていたが、1951 年の語劇祭、ロシア語劇『披露宴』において初めて女子学生が出演した。

語劇は長らく専用舞台を持たず、公演場所を読売ホール、千代田公会堂などへと転々と移っていたが、1961 年、舞台装置を備えた創立六十周年記念講堂が西ヶ原キャンパス内に設置され、以降、語劇はこの

専用舞台上演されるようになり、本学の顔として復活を遂げた。また現在の「外語祭」の呼称は 1955 年に遡る。同年には第三十六回語劇祭と第三回文化祭を合わせ統一外語祭としての一週間に渡る開催が決定され、同年以降、語劇・文化祭の総称として定着した。



(上) 1950 年外語祭チケット



(上) 1968 年外語祭パンフレット

【学園紛争と外語祭】

1960 年代、語劇中心であった外語祭に変化が訪れる。それは大学祭の在り方だけでなく、東京外国語大学自体の存在意義を問う学生の問題意識から生まれた。1962 年第 43 回外語祭では、テーマを「外語大の現在及び未来をあらゆる角度から検討する」とし、将来的な大学像の模索が始まった。この年の外語祭では、東洋史研究者(ハーバード大学教授)で、駐日アメリカ大使であった E. O. ライシャワー氏を招き、「アメリカにおける地域研究」との講演を催している。これ以後、外語祭では「語学の可能性」、「地域研究」といった大学の教育・研究スタンスが問われるようになってゆく。

折しも、60 年代半ば以降、学園紛争の嵐が日本中を席卷する。本学は東京大学、東京教育大学(現在の筑波大学)とともに国立の「最重症三大学」と呼ばれ、紛争の激化は、外語祭にも影響を及ぼし、終には 1969～71 年の三年間、外語祭は中断を余儀なくされる。

学園紛争から一応の「正常化」を迎えた 1972 年、外語祭は再開された。しかし以後、約十年に渡り、外語祭では外語大の理念・存在意義が問い直され、外語祭の「質」が問われて行くことになる。そして、「“外語祭は専攻の研究を生かした学園祭である” という立場から語劇・地域研究を推進し、学述文化活動の集約発表の場としての外語祭」(第 57 回外語祭パンフレットより)が目指される中、「語劇再興」が謳われ、再度、語劇が外語祭の中心へと振り返り咲いてゆく。

【資料の寄贈について(お願い)】

大学文書館設置準備室では本学の沿革に関わる資料を収集しております。ご寄贈いただける資料がございましたら、ご連絡いただければ幸いです。(問い合わせ先 大学文書館設置準備室連絡先 tufsarchives@tufs.ac.jp)

